

会報

第 61 号 (2022/3/1)

〒720-0082
 広島県福山市木之庄町 4-3-14
 Tel&Fax 084-917-5937
 Mail
 h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



Community Renaissance
 Research Center

2022年の新年の「あいさつ」

代表理事 安川 悦子

あけましておめでと〜ございませす。
 といえるような年明けであるのかどうか、大いに疑問なのですが、なによりも無事に新しい年を迎え、新しい年にむかって「希望」を語ることができ。おめでたいことかもしれません。

人と人との自由な交流や自由な往来は、近代社会が築きあげてきた大きな成果であるのに、21世紀の今日、コロナに遮られて、自由に往来するのではなく、狭い自宅に蟄居を強いられている。隣人や友人に自由に会うことも、スーパーや百貨店にも自由にいくこともはばかられる。

まるで14世紀イタリアのボッカチオが描いた『デカメロン』の世界と同じようなことが起きています。ペストが蔓延したイタリアのフィレンツェで、ペストを逃れるために田舎に避難した10人の人たちが10日間山上に閉じこもった。その話を記録したもののというのが『デカメロン』であります。ここに登場する人物たちは、合理性と功利にもとづいて活動する近代的な人間であり、この人間類型こそが、その後の近代社会をつみだし作り上げていくこととなります。

封建領主のもと狭い農地に閉じ込められて生涯をおえる農民たちの世界から、ひろく海をこえ、利己心にもとづいて自由に経済活動をする商工業者たちの世界へと移行していく、そうした彼らの生活や社会をきりとったものでした。

今コロナのもとで私たちが直面している蟄居は、イタリアルネッサンスの時のように、21世紀を支配する新しい社会を生み出す転機なのではないか。こう考えてみると、新しく生み出される世界がどのようなものであるのだろうか気になってきます。

「コロナで蟄居している間、考えていたのはこのことでした。20世紀世界を支配してきた「金儲け(資本)」「戦争」や「貧困」を絶滅するきっかけに、これはないであろうか。「知」や「社会システム」の新しいルネッサンスとならないであろうか。戦争と貧困のない世界を築きあげる、その途筋を語りあいましょう、大いに。2022年の今年は。



今号の内容

- ・ 新年の「あいさつ」
- ・ 今後の予定
- ・ ヤギの近況
- ・ 姥捨て山からのレジリエンス
- ・ マンガ『その女、シルバ』を味わって
- ・ 編集後記

今後の予定

おわび

11月、「油断しないで 災害にどう備えるか！現地視察、町歩き」の企画が講師の都合により延期となりました。この企画は4月以降に開催を予定しています。

連続講座オカリナが吹けるよ！

ジェロントロジー研究会

「ケアの社会学」を読む会

恒例の講座は蔓延防止期間終了後、コロナ感染状況によってご連絡いたします。今年の「味噌」づくりは、事務局で予定しています。



問い合わせ

NPO法人コミュニティルネッサンス研究所
 電話・FAX: 084-917-5937
 メール: h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp

ヤギの近況

今年も寒い日が続き、世話をしているヤギ、ウサギは大丈夫かな、と心配になる日もありました。ASAHIさんをはじめ毎日世話をしてくださる方に支えられてヤギたちは元気に過ごしています。時折、保育所の子ども、ご近所の方が足を止めて声をかけている様子を見ます。どの方も、動物の姿に癒やされている様子で笑顔を向けていて、いいなあと思います。

昨年は二月にヤギのチイちゃんが、双子を出産しました。今年はユキちゃんのおっぱいが張ってきているように見えます。今年もユキちゃんに赤ちゃんかな、とまわりで話しています。

この春、可愛い赤ちゃんヤギの誕生が楽しみですね。

春が来たメエー



姥捨て山からのレジリエンス

牧田 幸文

2020年の安川代表の挨拶にも触れられていたように、最近、レジリエンスという言葉をよく見かける。コトバンクで調べてみるとレジリエンスとは、「困難で脅威を与える状況にもかかわらず、うまく適応する過程や能力、および適応の結果のことで、精神的回復力」と説明されている。今回は、このレジリエンス・回復力を持つ高齢者の物語を二つ紹介しようと思う。一つ目は、日本の姥捨て山伝説のその後を描いた映画『デンデラ』¹⁾。二つめは、アラスカ版の姥捨て物語『ふたりの老女』²⁾である。この二つの物語は、飢饉による食糧不足や貧困、年齢を理由にコミュニティから切り捨てられた老女たちの話である。国と文化は違うが、老女たちがこれまでの経験知を活用し、身体を酷使しながら生きていくストーリー展開となっている。

日本には、古くは世阿弥の『姨捨』³⁾、そして昭和では深沢七郎の『樽山節考』⁴⁾において高齢者が捨てられるという悲しい物語がある。前者は、捨てられた老婆の悲しみが現世と来世の境界線上に幻想的に描かれている。後者は、家族のため自ら進んでお山に入り、死へ向かう老女の思いが丁寧に描かれている。特に『樽山節考』は映画化され、主人公おりの死へのいさぎよさと家族への思いが美しく描かれ、死生観

が美しいと賞賛を浴びた⁵⁾。しかし、映画『デンデラ』は『樽山節考』で描かれていた老女の美化された自己犠牲とは反対に、力強く生きる物語になっている。30年前に村の習慣で家族に山に捨てられた老女メイは山奥で生き残り、自分と同じように捨てられた老女たちを助け出し、自分たちの村『デンデラ』を作り上げる。ここでは老女たちがそれぞれの能力と知恵を使って逞しく生きていく姿が描かれている。しかし、デンデラは平和な共同体ではなかった。そこには対立と葛藤がくり広げられ、最後にはメイの強い思いによって、自分たちを捨てた元の村へ復讐することも目論む。あつけに取られる結末であるが、彼女たちの生への執着は強くアクティブに生きる姿が描かれている。

もう一つのレジリエンスの物語である『ふたりの老女』は、アメリカ・アラスカ州のユーコン川流域に住むアサパスカ族の口述物語をベースにしている。自身もアサパスカ族である作家のヴェルマ・ウオーリスが母から聞き書きしたものを1993年に発表した。アラスカの極北に住む遊牧民たちが、ある年に厳しい飢えと寒さの中、生きていくための最後の選択肢として、弱っているふたりの老女を原野に置き去りにしたことからの物語は始まる。極寒の原野にふたりの老女を置き去りにすることは、つまり死を意味する。置き去りにされた老女は、寒空の下、自分たちが老いを理由に部族の活動に積極的ではなかったことを後悔しつつ、記憶を遡って幼い頃から教え込まれた技と知

識を思い出し、道具を作り、小動物を捕獲し、獲物がある別の場所へと移動を始める。彼女たちは身体的に不自由であっても、獲物を得る感覚を取り戻し、その喜びを通して、自分たちの気持ちを奮い立たせ、次へとアクションをとり、やがて精神力と身体を回復させていく。ふたりは老いと残酷な運命を直視しながら、それに身を委ね、そして記憶を辿って自然の中で生きていく中で、回復どころか強さを身につけ、厳しい冬を乗り越え、生き延びていく。

姥捨のストーリーは日本だけではなく、各国にもありその内容は死生観とその時代に生きていく高齢者への人々の眼差しによって違いがあるようだ。一方で、そうした姥捨のストーリーを覆す『デンデラ』と『ふたりの老女』は、これまでのステレオタイプのやさしい老女ではなく、厳しい環境の中において、もがき苦しみながら自分たちの力で逆境を切り開く強い老女たちを描いている。二つのストーリーは、私たちが持っている身体的に弱いという高齢者の先入観を大きく覆し、人々が培ってきた能力を回復させる可能性を提示してくれている。



注

1 天願大介監督『デンデラ』

アミューズメントソフトエンタテインメント、2011年

2 ヴェルマ・ヴォーリス著 亀井よし子訳

『ふたりの 老女』草思社文庫、2014年

3 人類学者であるダネリー氏は、2014年に出版した著書 *Aging and Loss* で姥捨伝説を審美的と賞賛し、お山はこの世とあの世との境界領域であるとみている。彼によると、日本の後期高齢者達はお山に入らないがお墓参り、仏壇の面倒を見ることなどを通して、日々の生活の中で境界領域に入っているという。そして高齢者達は、あの世での暮らしも自分の現在から繋がるライフコースとして考えていると指摘する。

(Daneely, J. (2014) *Mourning and Maturity in Contemporary Japan*, Rutgers University Press. 76)



マンガ「その女、シルバ」を味わって

1 シビリアな内容。だけどホツとするマンガ

『このマンガ、ブラジル移民のことが書いてあって面白いよ』と友人から借り、そういえば広島県も移民の多いところだった、と思いながら読み始めました。ところが冒頭に出てくるのは40歳になった女性が電車の中の高齢女性に席を譲る場面。読み進む内に、この女性は35歳でパートの洋服売り場から倉庫に配置転換され、生き方と金銭面から将来に不安を抱えている事が分かってきました。そして、たまたま通りかかりに見つけた求人広告の、時給と40歳以上という条件に惹かれて店に飛び込み、結果としてバーのホステス見習いになる福島出身の「笛吹 新」であることも。

この店はバーテン・ママやホステスの平均年齢は70歳という「高齢バー」。しかも店を始めたのが本のタイトルの「シルバ」というブラジル移民帰国者。このようなことが、ホステス見習い生活のなかで「笛吹新」の疑問や先輩ホステス・マネージャーの思いつきの中での明らかになっていきます。

この漫画はその昔「ちばてつや」のマンガを読んだときのように、どことなくホツとするものを感じました。物語のなかに出てくる彼女たちの戦中・戦後の生活は並大抵ではない厳しいものであったにもかかわらず、なのです。

マンガのなかでも、シルバたちは決して優しい言葉をかけるわけではない。しかし、彼女は皆のなか

にドンと座って悲しいことや悔しいことを笑い飛ばすたくましさを持ちながら、料理とダンスとお酒を楽しむ店を取り仕切っていたのではないか、と思いました。

2 作者は何を言いたかったのだろうか？

5 冊の漫画を読み進むうちに、「この作者の言いたいことは何だろう、と思うようになりました。「移民」、「戦争」、「原発事故」など、過去から現在までの悲しい出来事を知って欲しいだけではなく、もっと大きなテーマではないか、と思います。

人は必ず年齢を重ねていきます。私自身が高齢者の仲間入りしているためか、若い人から高齢者まで「イキイキ」と輝いて生きていける、と言いたかったのではないかと思いました。

そのためには、幾つになっても「何もなくてもよい」ことは決して「大事に」してもらっていることではない、ということ。誰かと笑ったり話したり、そしてまわりの人から「必要とされる」ことがあってこそ「人間らしく輝いて生きる」と言いたかった。

さらに「輝いて生きる」とことを妨げるような事象は、過去だけではなく現在も世界の各地で発生している。その芽をつむためには、今自分に関わっていないことも、「他人ごと」と考えないで「日々暮らしているその場所」から何らかの行動を起こしていくことが大切だ。

「この様なことを作者は、日常の穏やかなことばをとおして『笛吹新』が気づいていくストーリーを描きたかったのではないかと思いました。

3 おわりに

このマンガのなかで、小学一年生のとき、進駐軍からの粉ミルクの事を思い出しました。ララ物資として在米日本人が中心になって送ってくれたものであると知り、大変驚きました。このようにへえ、と思うことも色々あるマンガでした。NPOにも一揃いこのマンガがありますから読んでみたい方はどうぞお声がけください。(文責 加納)

注 1

受賞式での作者コメント



「今回はいろんな方に取材をして、特にその方たちが背負ってきた苦しさ、悔しさ、怒り、悲しみみたいなものを、私の力量でさばけるんだろうかというくらい、たくさん受け止めてきました。この苦しさや悲しみを歌(物語)にすることで、喜びに変えられるのではないかという手応えをほんの少し感じたことが、私にとって収穫だったと思います。」

AERAdot (dot.asahi.com/wa/201906060008.htm?page1)

『その女、シルバ』の概要

作者：有間しのぶ

掲載誌：ビッグコミックオリジナル増刊号

(2011年6月～2018年8月)連載

出版社：小学館、五分冊

受賞：2018年 第23回手塚治虫文化賞マンガ大賞受賞。

ドラマ化：東海テレビ制作、TBS系配信。

編集後記



コロナ禍での3回目春が来ようとしており、マスク姿もあたりまえになりました。もうすぐひな祭り。我が家では5歳の娘がおひな様の前でままごとをしています。世界では、平和の祭典オリンピックが行われ、一方では、国どうしがにらみ合い戦闘に至っています。コロナ禍の各国では社会経済格差の拡大にもなって健康格差も問題になりました。目につくにくかった様々な問題が表に現れました。ひきこもり生活が続き、心の不調を感じる人も多いと聞きます。今回の姥捨て山、シルバの書評の中で共通するのが、ともに人が支え合って生きていく素晴らしさなのではないかと思いました。この春は、人々が対面つながりあい笑いあってくれたものですね。花見の季節には一緒に桜でも見て歩きませんか。

また、この度、新年号が遅れてしまいご迷惑をおかけしました。(澤)

会費のお願い

2021年度の会費が未納の方は、納付をお願い致します。コロナ禍で活動があまりできておらず大変恐縮ではありますがよろしくお願い致します。

NPOへのお便り募集!



「ミルネへのお便りを募集します。ご感想・ご意見などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。